

京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子
1981年8月号

8月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その四十七

蟻 集 る 骸 一 つ に 悔 い 一 つ

緑 蔭 の 都 会 の 戦 士 青 む ま で

緑 蔭 を 抜 け る ケ ー ブ ル 三 回 忌

一 毬 に 煩 悩 一 つ 四 葩 の 夜

あ ぢ さ ゐ る や 泣 き ぼ く ろ よ り ひ と 雫

吹田万博公園三句

大 緑 蔭 太 郎 の 塔 の 鳥 瞰 図





園 広 し 実 梅 一 つ を 持 て 余 す
緑 蔭 の 人 語 は 問 は ず 塔 古 ぶ
夏 蝶 の 影 が 翳 追 ふ 霞 が 関
空 蟬 の 風 の 噂 に 爪 立 て る
サ ー フ ァ ー の 千 波 万 波 の 光 ゲ 背 負 ふ
石清水八幡宮三句
を が た ま の 光 り の 宿 り 青 葉 木 菟
三 川 を 束 ね 大 神 雲 の 峰
鳩 化 し て 神 塔 灯 す 青 葉 闇



近詠

鈴鹿 仁

竹皮を脱ぐ

あぢさゐの円い風くる仏みち
竹皮を脱ぐや雀の私語殖す
三川の一語一音梅雨もよひ
浴衣着て遊びごころの不惑かな
硯洗ふ児の覚えたき字の多し



—
近 詠
—

和田 照海

力石

力石祀られてより遠卯波

磯蟹の夜這遊びや力石

寄居虫の風にもこぼれ力石

海酸漿立ち上がらむと力石

どんよりとして夕風の力石



松本 鷹根



塩貝 朱千

沙羅咲けり

五月晴れ眺望過去を流す丘

峡の里丈競ひゆく淡竹晴

生徒減る校舎裏庭枇杷たわわ

比良望む入江浮巢の朝和ぎに

沙羅咲けり神の導く木洩れ日に

近 詠

なんじやもんじや

若葉騒ほほ笑み解かぬ弁天さま

てのひらほどのみ佛涼し大伽藍

なんじやもんじや鴉一羽に径ゆづる

子つばめや母を探してマリア佛

みづいろの泉に触れて来し風に

英華採集

花おぼる姫の駕籠追ふ中山道

松 戸 岡 山 敦 子

皇女和宮の降嫁下向は、公武合体反対派の動きを考慮して急峻な中山道へと変更された。お伴の数は八千人近くでその行列は五十キロにも及んだと言われている。また、江戸時代の参勤交代等により各地に宿場町が整備され今も名残りの風情を残している。掲句の「姫」は、勿論、和宮のことで宿場町散策の折にこの史実に想いを馳せたのであろう。行列の豪華絢爛さには、桜の雅がよく似合うも今の時を思えばそれは夢まぼろしの感が強く「花おぼる」の季語と響き合う。

竹皮を脱ぐ音けふは検診日

相 生 禰 寝 瓶 史

季語「竹皮を脱ぐ」には、筍が成長するにつれてその皮を下の方から脱いでゆく、所謂、明日に向かつての希望が見えてくる。反面、検診の日を迎えて少しナーバスになっている作者には過剰なまでに色々な音が聞こえてくるのだろう。検診日という非日常の一日であるがゆえに作者の心の不安を掬い取っている内面と対照的な季語のあしらいは響き合っていると見える。

夏みかん果実も夫も糖度増す

京 都 藤 本 啓 子

果物の生命線は、果実の糖度にあり「○○産」のラベルが貼られることによりまた商品価値も上がることになる。糖度「○○%」の表示があればそれだけで果物の甘味が消費者に伝わりやすい。掲句の場合、夏みかんの糖度が増えて満足感を覚える作者ではあるが、「夫の糖度」が増えることに些かの不安を感じているわけで実に俳味を醸し出した一句となっている。

神麓集

夜の四葩 藤岡紫水

一枚の額となる死や夜の四葩
優曇華や遙かより闇来つつあり
手さぐりの余生またよし額の花
影細き峯の半月梅雨の冷え
一本の大樹の中の蟬時雨

秋 隣 沼田巴字

くさぐさの心の寄りや秋隣
豆煎れば爆ぜる音する広島忌
流燈や海は陸より早く暮れ
二十四色使ひ切つたる揚花火
蛸や一日の労を熔かすかに

蜘蛛の脚 丸井巴水

音速で古い満開の花と撮る
一輪は不動を保つ花菖蒲
上席はしぶき被りの舟遊び
青野駈く犬に好かるる人嫌ひ
垂直に降り来て開く蜘蛛の脚

古茶新茶 植村蘇星

改元の話の弾む古茶新茶
世は令和素心変らむ若葉風
蒼穹や太き葉脈青葉光
ガーデンと言ふ程も無し青葉風
神がかりならむ宵雨七変化

神麓集

恋のはじめ

北川 孝子

鈴蘭のひと束恋のはじめなり
薫風に仁王のまなこ力満つ
ついで寒気かかり放つ空の青
梅雨さなか地球も深く呼吸せり
風鈴のとびついて来る夜風かな

結び目

直江 裕子

菜の花や私ひとりの奈落ふと
たけのこと大地の息吹き掘り起こす
それとわかる母の結び目ほどく春
花水木当てになる子もならぬ子も
やはらかに春の柱の抱く闇

空 欄

高木 晶子

豌豆豆ぎつしりどれも形見なり
空欄の今日は明日へ椎の花
駅を出て水無月といふ劇場へ
螢闇濃くする為に人集ふ
紫陽花や人を殺めぬ大団円

令和の夏

伊藤 希眸

夏空の雪溪こと事件あるやうに綴り
中山道令和の夏をひた走る
永久の雪溪アルプスの尖に雷起る
髪を切る始めは青葉次第に闇
なんじやもんじやの花待ちあふ人は公家の衆

神麓集

指揮棒 奥田筆子

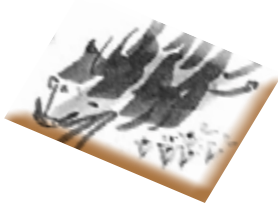
くるし気に指揮棒振るや憲法日
菜の花の薺^{えい}みや知己は散々に
菜の花や杖五七五に折りたたむ
とんとんの生計でよし蝌蚪の足
桜に触れ溺れたやうに呼吸して

虹の全長 井上菜摘子

逢ひたしが遺書青葉の風にひらく
麦秋をひたすら北へ乗り継いで
虹の全長生き急ぎかもしれないぬ
梅雨明くるまだ本降りのみぞおち
いつかみな舞台を降りる凌霄花

壺の闇 村田あを衣

一揆塚蟻のひきぬる蟻むくる
夏至過ぎぬ満たしきれざる壺の闇
神名備へケーブル青葉押し開き
神山の姿正しき夏に入る
山滴る男山なる漢ぶり





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

一件は支離滅裂や春の雷

かたくりの一輪吐息つくやうに

花水木学園駅の朝の顔

桜五分伏見大仏天地続べ

着包みが主役の桜まつりかな

初つばめ水のあふみの水匂ふ

三叉路の一路に迷ふ春うれひ

言ひだせずまだブランコと揺れてゐる

湖寄りに傾く春の物おもひ

春光を足して仕上げるオムライス

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

水際の水昏れのこるゆきやなぎ

空欄を埋めよせつせと草を引く

絮たんぽぽ未完の恋の着地点

鳥雲に合はせ鏡の湖と空

若葉風礎石ひとつの水城址

ふる里や芥子は火の刻風の刻

思ひ出は身勝手なものポピー揺る

惜別やいまもぬくもり豆ご飯

薄暑光道問ふたびに道がのび

下町の風のようにこぶ焼蛤

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

光陰のかたちに花の吹雪きけり

福 山 亀井 福恵

人生といふ短編の日の永し

地下街にひとのあふるる広島忘

眼裏の奥に終戦日の夕日

龍宮の潮吹きといふ春怒濤

産土の大樹に宿る立夏かな

句作りの暗中模索蛸の足

手作りの足出て腹出て柏餅

根底は淋しがり屋や八重桜

黒椿水平線を遠まなざし

主旋律一音上げて夏柳

酔に寝かす鯖の蒼さよ日本海

箸置きのやうに人待つ夏木蔭

初夏や瘦せる工夫の処方箋

五と言ふは切りにくい数初メロン

草笛やみ吉野の郷引き寄せる

膝抱けば妣に近づく薄暑光

梅雨の闇本州は自立失調す

秀句得る海雨の目覚め新樹光

かごめかごめ梅雨晴れの眸を光らせて

福 知 山 西村 白籽

京 都 菊池 和子

高 槻 安田 優歌

花おぼろ姫の駕籠追ふ中山道

松 戸 岡山 敦子

花の風箏姫なごりの御座所かな

こひのぼり空を泳ぎぬ塩羊羹

四の五のと言ふ若者よ葱坊主

竹皮を脱ぐ音けふは検診日

相 生 禰寝 瓶史

入梅身の計算出来ぬ水加減

皇室の美顔揃ふ日子燕も

夕焼けの定規引く線小やけ色

夏みかん果実も夫も糖度増す

京 都 藤本 啓子

陽炎や杖になる息子の叱咤かな

非常口見もせず熟睡夏の蝶

一八のなよつと立ちて夕寒し

躑躅燃ゆ施設で茶会和の心

アリソナ 伊吹 之博

逃水や歩みの早し師の背中

紅しだれ白鷺城の屋根光る

仕事終へ砂漠の町に春の星

